

巻頭言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 直人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032022

巻 頭 言

東京女子医科大学医学部衛生学公衆衛生学（二）講座

ヤマグチ ナオヒト
山口 直人

診療ガイドラインの作成が本格的になったのは1960年代の米国であった。第二次世界大戦後に空前の経済的発展を享受していた米国では、生物医学研究に膨大な資金が供給され、医学のあらゆる領域でイノベーションが飛躍的に進んだが、最新の医療技術が適切に医療の現場に導入されないという問題が表面化した。その結果、医療に許容範囲を超えたバラツキが生まれて社会問題にもなった。このような状況に対する対応策として注目されたのが、診療ガイドラインであった。1980年代に入ると英国などのヨーロッパでも診療ガイドライン作成が本格化し、そのような流れは20世紀末に我が国にももたらされた。1990年代には、科学的根拠に基づく医療（evidence-based medicine：EBM）の考え方もアカデミアの世界を中心に普及が進み、診療ガイドラインは、EBMを普及させる手段として確立されて今日に至っている。

厚生労働省は、1999年に出された医療技術評価推進検討会の報告書を受けて、EBM普及推進のために主要疾患の診療ガイドラインを整備することを決め、厚生労働科学研究費で診療ガイドライン作成を支援するとともに、作成された診療ガイドラインを医療の現場に普及するためのEBM普及推進事業を公益財団法人日本医療機能評価機構（評価機構）に託すこととなった。事業の愛称はMinds（マインズ）と名付けられた。当初は、厚生労働科学研究費で作成された診療ガイドラインをインターネット上で提供するサービスが中心であったが、2011年度からは、Mindsが厚生労働省の委託事業として事業化されたことから、我が国で作成された診療ガイドラインを網羅的に検索して、作成方法の面で信頼性が高いと評価された診療ガイドラインをインターネット上でMindsガイドラインライブラリとして提供している。平成29年12月2日現在、206の診療ガイドラインが提供されている。当初の我が国の診療ガイドラインは引用文献が充実した教科書といった体裁のものが多かったが、海外では作成方法が飛躍的に進化して、システムティックレビューによるエビデンスの精査が不可欠と考えられるようになり、有益面と有害面のバランス、患者の価値観と意向、さらには、医療経済的な視点も加味して、最善と考えられる推奨を提示する作成方法が確立している。これを受けて、「Minds診療ガイドライン作成の手引き2014」を公開するなど、作成組織への支援を強化している。

私は、2002年に東京女子医科大学に着任したが、同年に開始されたMindsを、評価機構の理事として担当して今日に至っている。したがって、Mindsは大学のご理解を得て続けられてきたものである。今回、私の定年退任に当たって、Mindsを支えてくださっている諸先生にご寄稿をいただいて、東京女子医科大学雑誌に退任記念号を発刊していただけることは望外の幸せである。ここに、ご寄稿いただいた著者の先生方を始め、査読などでお世話になった先生方に深くお礼申し上げて巻頭言とさせていただきます。本当に有り難うございました。